

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010 年度

課題番号：20320033

研究課題名（和文） プロパガンダと芸術-「冷戦期／冷戦後」の＜芸術＞変容

研究課題名（英文） Propaganda and Art -Transformation of 'Art' during / after the Cold War

研究代表者

長田 謙一 (NAGATA KENICHI)

首都大学東京大学院・システムデザイン研究科・教授

研究者番号：20109151

研究成果の概要（和文）：従来プロパガンダと芸術は、全体主義下のキッチュ対自律的芸術としてのモダニズムの対比図式のもとに考えられがちであった。しかし本研究は、両者の関係について以下のような新たな認識を多面的に開いた：プロパガンダは、「ホワイト・プロパガンダ」をも視野に入れるならば、冷戦期以降の文化システムの中に東西問わず深く位置付けていき、芸術そのもののありようをも変容させる一要因となるに至った；より具体的に言えば、一方における世界各地の大型国際美術展に示されるグローバルなアートワールドと他方におけるクリエイティブ産業としてのコンテンツ産業振興に見られるように、現代社会の中で芸術／アートはプロパガンダ的要因と分ち難い形で展開している；それに対する対抗性格をも帯びた対抗プロパガンダ、アートプロジェクト、参加型アートなどをも含め、芸術・アートは、プロパガンダとの関係において深部からする変容を遂げつつあるのである。

研究成果の概要（英文）：Propaganda-art had been simply understood as a non-art in totalitarian states. The research has illuminated the picture as a result, against such myth, that propaganda (inclusive of 'white propaganda') makes root in the social system in the cold war era and after even in the west countries and the modern concept of art has been transformed in the 'total war' social system as we can see it typically in the huge international art exhibitions and the products of contents industries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2009 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2010 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：芸術諸学

キーワード：美術 芸術 プロパガンダ 冷戦 冷戦後 総力戦 全体主義 文化戦 国際展

1. 研究開始当初の背景

【冷戦後世界におけるプロパガンダ】冷戦終結後 10 年、「9.11」によって 21 世紀が新たな戦争の世紀として始まった。それは同時に、新たなプロパガンダの時代の始まりをも告げた。しかも、これは、一時の「戦時」宣伝の域にとどまるものではなく、むしろ第二次世界大戦期以降進んだ「総力戦体制」（山之内靖；佐藤卓巳）と呼ばれうる社会深部から

する編成変容に関するように見える。この事態のもとで、プロパガンダはこの「総力戦体制」のモメントとして捉え返されることとなる。

【研究的背景】プロパガンダは人間の感性・感情に訴えて宣伝の目的を達成する活動として、特に「似非芸術」としてとらえられてきた。しかし、プロパガンダが現代社会深くそのエレメントとして組み込まれるとなると、プロパガンダと芸術の関係も、従来のよ

うな関係にとどまることはできない。この本研究のテーマである〈プロパガンダと芸術〉に関する研究としては、一方で、先ずファシズム期の芸術・デザイン問題研究が先行し蓄積されてきた。(B. Hinz, 1979; C. Friemart, 1980; P. Reichel, 1991; R. Giffin, 1995 等)。次いで、「冷戦」終結後になると、旧社会主義諸国の芸術諸問題を扱う研究・美術展等が相次ぐ。(Agitation zum Glueck, 1994; Wendy Kapla, 1995; Aufstieg und Fall der Moderne, 1999 等)。他方では、上記進行と並行する時期に、第二次大戦期以降のアメリカ合衆国における抽象表現主義絵画台頭の政治的背景を問う議論が起こる (M. Kozloff, 1973; S. Guilbaut, 1980 等) が、次いで M. Kimmelman, 1994; R. Burstow, 1997; H. M. Franc らによって、その諸議論の是正が求められてきていた。【冷戦後のアート展開】冷戦後の美術にかかわる顕著な動向として世界各地の大型国際美術展の興隆や「創造都市」の追求、あるいはコミュニティとも結びついた参加型アートの展開、そしてアートによる何らかの社会的正義の表明等の諸現象があげられる。これらはいずれも近代芸術概念の問い直しを迫るものである。

2. 研究の目的

本研究は、上に示した背景を自覚するもとで、主として第二次世界大戦期／「冷戦期」／「冷戦後」／「9. 11 以後」の諸時期における、〈芸術〉変容の諸相をプロパガンダとのかかわりにおいて多面的に解明せんとするものである。ここでいうプロパガンダは、①広範な大衆の意識・態度に影響を及ぼすべく意図的に展開される価値中性的な意味を踏まえつつ、②政治的・宗教的・思想的信条・価値観や権力意図を貫徹する意識操作という、通例否定的に論じられる活動を中心に意味する。後者は、通例、ナチスやスターリニズムにかかわって論じられることが多いが、実際には、その発端は第1次世界大戦期アメリカに認められ、チョムスキーの指摘する通り、第二次世界大戦以降今日に至るまで、アメリカが世界規模で展開しつつある活動でもある。この時期は、同時に、抽象表現主義やモダンデザインに始まる、アメリカ文化の世界席捲の時代とも重なる。従来、〈芸術〉は社会的権力から隔絶してプロパガンダと敵対するものとして語られてきたが、実際には、第二次世界大戦以後の諸時期に、芸術とプロパガンダと政治は、深部においてかわりあってきたのではないか。本研究は、「全体主義におけるプロパガンダ」対「民主社会における芸術」という単純な対比図式を超えて、戦後美術・デザインを再検討することを通して、この深部における芸術と社会の関係の解明を期すものである。

3. 研究の方法

本研究は、上記研究課題にかかわる諸問題に、それぞれの角度からすでに研究的蓄積を有する多数の研究者の参加する総合的共同研究として遂行された。長田の統括の下に、地域的にはアジア・ロシア・USA/中南米・ドイツ・国際・日本、領域的には、美術・メディア・デザイン工芸・写真・映画等に応じ各分担共同研究者が、個別研究を進め、その成果を共有し、共同究明のために全体共同討議のセミ・オープンな場として、その都度テーマを設けた研究例会を設定した。必要に応じてゲストを招き議論を深めた。最終年度には、研究成果を特に広く問いつ討議する場を設け、そこに海外からのゲストをも招き成果を深め、最終的には成果論文集をまとめる。

4. 研究成果

【「プロパガンダと芸術」に関する知見】個別的角度からの研究成果詳細は、論文集及び後掲主要研究業績に示すが、それらの総括として次の様な知見を得るに至った。

○20 世紀半ば以降、感性・感情に強く働きかけて社会成員の意思形成を図るプロパガンダは、全体主義下においてのみならず西側諸国を含む世界各国で、戦時に限らずむしろ平時において、その社会編成のうちに深く位置づくに至り、サブカルチャーからデザイン、そしてハイ・アートまで含む感性文化の全域に深く浸透してきている。この事態を踏まえ近代の芸術概念は深部から再検討を迫られるに至り、この課題に対し、個別論文を通して多面的に答えを提示した。

【資料収集】とりわけ研究代表者長田のもとには、1930 年代以降現代に至るアメリカ及びドイツ、日本の美術・デザイン・美術教育資料を収集し、さらに分担研究者各自の役割に応じ、それぞれの領域の資料収集を進めた。

【研究例会における報告】個別研究の成果が多様に示されたがここでは題のみを示す。

【2008 年度】第1回(6月1日)は研究計画確認、第2回(12月23日)：木田拓也(「伝統工芸」の成立)・長田謙一(閉鎖後のバウハウス)・森佳三(マルティエニ研究)・大島賢一(ニューディール期美術教育)。第3回(1月12日)：イギリスのアーツカウンシル評議員をつとめるフランソワ・マタラッソ氏を含むゲスト(*印)をも招き、セミ公開国際コロキウムを開催。午前：楠見清(キノコ雲の表象)/藤川哲(国際美術展 2008)/福岡良明*(占1 領期日本と戦争映画)/牧陽一*(中国現代アート)/午後：神野真吾(チバトリ)/高晟埃*(韓国民衆美術運動)/フランソワ・マタラッソ*(アートと参加)の各報告を受け、プロパガンダ問題を、プロパガンダそれ自体の展開とそれに対するオルタナティブの可能性とい

うに側面から、参加者 75 名とともに研究討議を行った。【2009 年度】(1)8 月新潟:久木元・長田・山口が越後妻有トリエンナーレにかかわり報告・討議、(2)12 月福岡(コーディネイト後小路):後小路・藤川・久木元、さらにゲストとして五十嵐里奈・岸清香が福岡アジアトリエンナーレを軸に報告し、討議、(3)2010 年 1 月東京:鴻野(カバコフ)・山本(USA におけるボイス評価)・長田(東西ドイツ美術)が報告し討議。前二例会では、現代の国際アート展をプロパガンダとアート問題の現代的結節点として仮説して研究討議をおこなった。【2010 年度】共同研究全体の成果総括の場として予定した総合コロキウムおよび報告論集は東日本大震災によって、繰り越しとなった。別途、科研「20 世紀沖縄の芸術諸領域の文化論的研究」(研究代表者:久万田晋)との共同共催コロキウム「沖縄の文化形成とプロパガンダ」を開催した(2011 年 3 月 13 日、沖縄県立芸術大学附属研究所)三島わか* (沖縄県立芸術大学)「本土復帰志向抑制ツールとしての伝統文化～琉球政府時代(1952-72)の対沖文化政策を事例として～」;豊見山和美* (沖縄県公文書館)「東京五輪聖火リレー沖縄島一周～占領下の祝祭と日の丸」;土屋誠一* (沖縄県立芸術大学)「復帰前後沖縄における写真表現をめぐる」;久万田晋* (沖縄芸術大学):「復帰前沖縄における米軍基地内での音楽活動」(コーディネイト:久万田晋+長田謙一)【2011 年度】震災のため国際コロキウムを繰越開催(2012 年 3 月 23 日-25 日)し、主にそれに基づいて論文集を作成した。3 月 23 日(金)東京国立近代美術館講堂:長田謙一「〈冷戦期/冷戦後〉における「プロパガンダ/美術」の変容」;S.1「戦後社会における〈プロパガンダ/美術〉の諸相」:楠見清「日本における戦争記憶とその表象」;加藤薫「アイコンとしてのチェ・ゲバラ」;藤川哲「都市のプロパガンダ——心の故郷としてのヴェネツィア」討論司会:三宅晶子/3 月 24 日(土)科学未来館会議室 ;2.S「アートプロジェクトと/かプロパガンダ」:山口祥平「空洞化時代におけるアートプロジェクトの現在」;呂佩怡*LU Pei-Yi (Independent Curator、台湾)「1990 年代台湾のオフ・サイト美術展——台湾化の実践」;朴昭炫*; Sohyun Park (Independent Art Researcher、韓国)「済州島海軍基地建設反対運動の中の美術」;神野真吾「学校化するアート、アートプロジェクト」;討論司会:熊倉純子* (東京芸術大学) /3 月 25 日(日)東京国立近代美術館講堂、S.3「プロパガンダと芸術」へ/から:山本和弘「サイレント・プロパガンダ——アメリカにおける“不都合なアーティスト”ヨーゼフ・ボイス黙殺史の研究」;木田拓也「1950 年代の日米文化交流のなかの工芸と

デザイン:ロックフェラー 3 世の日本旅行とアメリカの『ソフト・パワー』;高晟埃*/KO Seong-Jun (新潟県立近代美術館)「韓国モノクローム絵画にひそむプロパガンダ」;竹中悠美「FSA 写真プロジェクトにおけるプロパガンダとしての貧困イメージ」;鴻野わか菜「新生ロシア映画におけるチェチェンの表象」討論司会:長田謙一

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (104 件)

- ①長田謙一、デザインから考える—東日本大震災の現状と課題 (セッション記録)、デザイン学会誌『デザイン学研究』特集号、査読無、Vol. 18 No. 4、2011、pp. 25-26(27 の内)
- ②長田謙一、〈美術/教育〉の扉をひらく—新しい社会システムの中へ 第 7 回〈美術/教育〉のエッセンシャルズ——DBAEをこえて——、美育文化、査読無、Vol. 60 No. 5、2011、pp. 70-76
- ③後小路雅弘、「失われた無垢なわたし」という他者—東南アジア美術におけるゴーギャンズム、美術フォーラム 21、査読無、21 巻、2010 年、pp. 50-56
- ④加藤薫、グアダルルーペの聖母像信仰の謎の解明に向けて、神奈川大学経営学部 17 世紀文学研究会年報『麒麟』、査読無、21 号、2012 年、pp. 29-51
- ⑤三宅晶子、格差と国民主義を考える、現代思想 2010 年 4 月号、査読無、38-5、2010 年、pp. 211-225
- ⑥山本和弘、災後の美術、美術評論家連盟会報web版、査読有、第 1 号、2011 年、pp. 8-9
- ⑦ Вакана Коно (鴻野わか菜)、Сила исторической фантазии: биографии «вымышленных художников» Ильи Кабакова «偽史の想像力——イリヤ・カバコフ「架空の芸術家」、Japanese Slavic and East European Studies、査読有、32、2011 年、pp. 55-88
- ⑧木田拓也、「伝統工芸」と倣作:草創期の日本伝統工芸展の模索、東京国立近代美術館研究紀要、査読有、vol. 17、2011 年、pp. 97-10
- ⑨藤川哲、都市のプロパガンダ—ビエンナーレ間競争時代の国際美術展、山口大学文学会志、査読無、62、2012 年、pp. 67-94
- ⑩楠見清、魂の片割れ——ジョンとの出会い、ヨーコの音楽——アヴァンギャルドからポップまで、『美術手帖』、査読無、2011 年 9 月号、2011 年、pp. 66-72
- ⑪長田謙一、閉鎖後のパウハウス—ナチス・アメリカ・東西ドイツ—、ドイツ研究、査読有、43、2009 年、pp. 38-58
- ⑫長田謙一、原田直次郎「騎龍観音」(1890)における帝国日本の寓意—バヴァリアから護国寺へ—、美術史、査読有、2009 年、pp. 232-249、
- ⑬ NAGATA, Kenichi、Koga Harue's Sea

(1929) and "Soluble Fish": Proletarian Art, Max Ernst, Bauhaus and the Volte-Face of Machine Aesthetics, AESTHETICS, 査読有、13、2009年、pp. 249-267

⑭久木元拓、文化価値循環モデルによる都市ブランディング分析試論、「アート・マネジメント研究(日本アート・マネジメント学会誌)」、査読有、第十号、2009年、pp. 34-47

⑮久木元拓、集団的知性の形成から捉えたアートプロジェクトの組織経営政策分析評価試論、「文化政策研究 Vol. 3」(日本文化政策学会学会誌)編、査読有、Vol. 3、2009年、pp. 80-99

⑯後小路雅弘、昭和18年の日本旅行-ベトナム人画家ルオン・スアン・ニーの日記から-、哲学年報、査読無、69輯、2010年、pp. 225-252

⑰小林真理、文化芸術施設の管理のあり方、都市問題研究、査読無、第61巻、2009年、pp. 2-47

⑱小林真理、「文化行政」とは何であったのか、地域政策、第35巻、2010年、pp. 42-47、0

⑲木田拓也、"Traditional Art Crafts (Dento Kogei)" in Japan: From Reproductions to Original Works, The Journal of Modern Craft, 査読有、3、2010年、pp. 19-36

⑳木田拓也、一九三〇年代における工芸とナショナリズム: 『伝統工芸』前史について、美術フォーラム 21、査読有、19、2009年、pp. 131-136

*藤川哲、発言権/力の獲得-福岡アジア美術トリエンナーレの十年、山口大学文学会誌、査読無、60、2010年、pp. 1-26

*後小路雅弘、昭和期美術展覧会の研究 戦前篇(東京文化財研究所)、査読無、2009年、pp. 47-61

*三宅晶子、『資料で読む戦後日本と愛国心第3巻』所収論文『『愛国心』はどのように教育され、法制化されようとしているのか』、日本図書センター、査読無、2009年、pp. 285-298

*山本和弘、(水戸芸術館編)ヨーゼフ・ボイスのユートピア思想、あるいは総合芸術としての社会、フィルムアート社、査読無、2010年、pp. 128-139

*竹中悠美、芸術はどこから来てどこへ行くのか、晃洋書房、査読無、2009年、pp. 407-422

*長田謙一、"バウハウス、閉鎖後の"ドイツ研究、査読有、43、2009年、pp. 38-58

*長田謙一、〈美術/教育〉の扉をひらく(1)、美育文化、査読無、59-1、2009年、54-61

*長田謙一、それぞれの「生きる力」とく美術>-美術館と学校の連携とその可能性-、現代の眼、査読無、2009年、574、pp. 2-3

*KOBAYASHI, Mari, "Les collectivites locales et la culture: Etat des lieux en France et au Japon", et "Les Moyens de financement des politiques culturelles locales au Japon, des dépenses culturelles sous contraintes" Les

colloques du Senat, Les collectivites locales & la culture en France et au Japon., 査読無、2008年、pp. 21-26, 34-42

*小林真理、指定管理者制度の成果と課題、地域政策研究、査読有、46、2008年、pp. 6-13

*小林真理、ドイツにおける文化政策をめぐる議論と現状の課題、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「都市政策の課題と芸術文化の役割」研究ドキュメント、査読無、2008年、pp. 89-103

*鴻野わか菜、非公認芸術と絵本-Iリヤ・カバコフ『世界図鑑』、ユーラシア研究、査読無、第39号、2008年、pp. 38-43

*神野真吾、写真とどう向き合うのか、美育文化、査読無、58、2008年、pp. 13-17

*藤川哲、プロパガンダと戦争美術、山口大学文学会誌、査読無、59、2009年、pp. 23-42

*木田拓也、帝展が描き出す『工芸美術』の輪郭線、『美術史の余白に: 工芸・アルス・現代美術』「工芸」シンポジウム記録集編集委員会編、美学出版、査読無、2008年、pp. 109-120

*木田拓也、実在工芸美術会 1935-1940: 『用即美』の工芸、東京国立近代美術館研究紀要、査読有、13、2009年、pp. 37-64

[学会発表] (計46件)

①長田謙一、変容する「芸術」生成の場(企画趣旨・司会)、芸術学関連学会連合シンポジウム、2010年6月12日、東京都現代美術館講堂

②長田謙一、美学への挑戦——アートプラクティスの現場と「公共性」——(企画趣旨・総合司会)、美学・芸術論研究会シンポジウム、2010年12月8日、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス

③長田謙一、「青木繁と日本前衛の〈前夜〉」、石橋美術館「青木繁展」講演会(招待講演)、2011年4月16日、石橋美術館

④長田謙一、松本竣介「立てる像」(1942)および戦時期諸作品における象徴、美術史学会、2011年5月22日、同志社大学

⑤後小路雅弘、昭和18年の藤田嗣治、第25回アジア近代美術研究会、2011年2月13日、石橋美術館

⑥三宅晶子、ベンヤミンにおけるEingedenkenと戦後ドイツの「想起の文化」、日本独文学会2010年秋季研究発表会・シンポジウム: 戦後ドイツの「想起の文化」の司会・発表、2010年10月10日、千葉大学

⑦小林真理、自治体文化行政における制度形成の課題—市民協働の方法と大学の媒介機能、文化経済学会<日本>、2010年7月3日、兵庫県立大学

⑧KOBAYASHI, Mari, The Problem of Cultural Policy in Japan—Where do the regional theaters and concerts hall go?, First

International CIAM Expert-Forum 2010、2010年11月26日、Köln

⑨山本和弘、若江漢字と光学的彫刻、横須賀美術館講演会、2011年3月6日、横須賀美術館

⑩木田拓也、John D. Rockefeller III's Travels in Japan in the 1950s: Japanese Crafts and USA 'Soft Power' in the Cold War Era、7th

Conference of the International Committee of Design History and Design Studies、2010年9月21日、Palais des Académies, Belgium

⑪木田拓也、大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会/彩壺会/東洋陶磁研究所一大正期を中心に、東洋陶磁学会第39回大会、2011年11月26日、根津美術館

⑫神野真吾、芸術表現と学術研究～教員養成系大学における学術研究～、日本学術振興会(招待講演)、2011年8月25日、神田學士會館

⑬楠見清、Manga into Art マンガがアートになる日、国際交流基金主催「新次元 マンガ表現の現在」ハノイ巡回展関連企画講演会(招待講演)、2011年6月4日、ベトナム美術大学、ハノイ

⑭山口祥平、地域空洞化時代におけるアートアクティビティの考察-東京アートポイント計画「ひののんフィクション」の事例を中心に、日本文化政策学会、2010年12月12日、神戸大学

⑮長田謙一、萬鉄五郎「裸体美人」(1912)と「原人」の身体、美術史学会全国大会、2009年5月24日、京都大学

⑯長田謙一、美術/美術館/教育/社会の再定義の中で—これからの美術館の使命、金沢21世紀美術館5周年記念国際シンポジウム「MUSEUM EDUCATION 21」、2010年1月17日、金沢21世紀美術館

⑰山口祥平、アートプロジェクトの活動様態に関する考察川俣正「コールマイン田川」の分析を中心として、日本文化政策学会、2010年1月10日、東京芸術大学北千住キャンパス

⑱後小路雅弘、〈大東亜〉戦争と美術交流-仏領インドシナの場合、第16回アジア近代美術研究会、2009年4月25日、福岡アジア美術館

⑲小林真理、行政構造改革が戦後日本の芸術文化政策の成果に与えた影響に関する研究中間報告、日本文化政策学会、2010年1月9日、東京芸術大学

⑳木田拓也、国井喜太郎の固有工芸論:1930年代における『日本のもの』とモダンデザイン、デザイン史学研究会、2010年3月13日、埼玉大学

*神野真吾、シンポジウム「メディアと美術教育」、美術科教育学会、2010年3月27日、せんだいメディアテーク

*長田謙一、バウハウス、閉鎖後の、日本ドイツ学会、2008年6月21日、筑波大学

*長田謙一、原田直次郎「騎龍観音」(1890)

における「帝国日本」の寓意、美術史学会、2008年5月31日、東京大学

*NAGATA, Kenichi、Why, How and for Whom is Art/Education Necessary in the 21st Century?, International Society of Education through Art (InSEA)World Congress、2008年8月7日、Osaka

*後小路雅弘、The Vietnamese Artists' Journey to Japan in 1943 "The Greater East Asia War" and the Art Exchange between Japan and Vietnam、Symposium on Modern and Contemporary Vietnamese Art、2008年5月16日、Singapore Art Museum

*後小路雅弘、帝国日本の植民地・占領地における〈公〉の美術-官設美術展覧会と宣撫工作-、第12回アジア近代美術研究会、2008年7月19日、福岡アジア美術館

*後小路雅弘、そして巡礼はつづく-韓国のビエンナーレ、第14回アジア近代美術研究会、2008年11月16日、福岡アジア美術館

*KIDA, Takuya、Industrial Art Institute (IAI) and Designers from the Occident: Planting the Idea of Modern Design in Japan in the 1930S-1940S、6th International Conference of Design History and Design Studies、2008年10月26日、Osaka University

*山口祥平、芸術表現としてのプロセスマネジメント、アートマネジメント学会全国大会、2008年11月30日、昭和音楽大学

*山口祥平、参加/活動の芸術表現-川俣正「通路」展の考察を中心として、文化政策学会、2008年12月7日、帝塚山学院大学

〔図書〕(計38件)

①長田謙一(第1章分担)、東京アートポイント計画2010、熊倉純子ゼミ公開講座『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990-2010』、2011年、250

②吉見俊哉、集英社、天皇とアメリカ、2010年、252

③後小路雅弘(共著)、南洋芸術学院(シンガポール)、伝承と開拓、2011年、166

④加藤薫、岩波書店、ディエゴ・リベラの生涯と壁画、2011年、869

⑤三宅晶子(編著)、日本独文学会、戦後ドイツの「想起の文化」(日本独文学会研究叢書078)、2011年、93

⑥伊藤裕夫、松井憲太郎、小林真理編、美学出版、「まえがき」「ドイツの公共劇場の成り立ち」「専門家と文化施設」、『公共劇場の10年-舞台芸術・演劇の公共性の現在と未来』、2011年、397

⑦鴻野わか菜(分担)・小長谷由紀編著、明石書店、『社会主義的近代化の経験-幸せの実現と疎外-』(偽史の想像力-イリヤ・カバコフ「架空の芸術家」)、2011年、352

⑧神野真吾ほか、千葉アートネットワーク・

プロジェクト・千葉市美術館、WiCAN2010 DOCUMENT、2011年、108

⑨長田謙一・山口祥平(編著)、東京文化発信プロジェクト室、ひののんフィクション 2011、2011年、48

⑩吉見俊哉、テッサ・モーリス-スズキ：“天皇とアメリカ”、集英社、2010年、252

⑪吉見俊哉(分担執筆)、岩波新書編集部編『日本の近現代史をどう見るか』シリーズ日本近現代史(10)、岩波書店、2010年、256

⑫川俣正・山口祥平、Tadashi Kawamata Coalmine Project 1996-2006、アート印刷内アートの力を出版する会社、2009年、400

⑬川俣正、山口祥平、アートプロジェクト研究、CIAN、2010年、200

⑭小林真理、「グローバル化時代の文化政策の課題-ドイツ・新しい公共空間の提起」『グローバル化する文化政策』所収、勁草書房、2009年、225

⑮イリヤ、エミリア・カバコフ(鴻野わか菜・古賀義頭による訳と解説)、プロジェクト宮殿、国書刊行会、2009年、320

⑯吉見俊哉、ポスト戦後社会、岩波書店、2009年、240

⑰BankART1929(長田謙一、神野真吾分担執筆)、アートイニシアティブ：リレーする構造(アートプロジェクト検見川送信所/Wican)、BankART1929、2009年、223

⑱木下直之(編著)(小林真理分担執筆)、芸術の生まれる場、東信堂、2008年、238

⑲住友文彦(編)(山口祥平分担執筆)、ドキュメント 川俣正[通路]、東京都現代美術館、2008年、48

⑳篠原資明(編)(神野真吾分担執筆)、岩波講座 哲学 07 芸術/創造性の哲学、岩波書店、2009年、1-10

*Bruce Granvill編(Kiyoshi Kusumi分担執筆)、Krazy! : The Delirious World of Anime + Comics + Video Games + Art、Vancouver Art Gallery, Canada、2008年、184-185、190-225

*美術手帖編集部編(楠見清分担執筆)、現代アート入門-モダンからコンテンポラリーまで、世界と日本の現代美術用語集、美術出版社、2009年、160

*Chim↑Pom + 阿部謙一編(楠見清分担執筆)、なぜ広島をピカッとさせてはいけないのか、無人島プロダクション、2009年、8-103

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

長田 謙一 (NAGATA KENICHI)

首都大学東京大学院・システムデザイン研究科・教授

研究者番号：20109151

(2)研究分担者

楠見 清 (KUSUMI KIYOSHI)

首都大学東京・システムデザイン学部・准教授

研究者番号：30514004

山口 祥平 (YAMAGUCHI SHOHEI)

研究者番号：60376910

首都大学東京・システムデザイン学部・助教

後小路 雅弘 (USHIROSHOJI MASAHIRO)

九州大学大学院・人文科学研究科・教授

研究者番号：50359931

加藤 薫 (KATO KAORU)

神奈川大学・経営学部・教授

研究者番号：40291968

三宅 晶子 (MIYAKE AKIKO)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：50157608

吉見 俊哉 (YOSHIMI SHUNYA)

東京大学大学院・情報学環・教授

研究者番号：40201040

小林 真理 (KOBAYASHI MARI)

東京大学大学院・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：20308547

山本 和弘 (YAMAMOTO KAZUHIRO)

栃木県立美術館・学芸員

研究者番号：30360473

鴻野 わか菜 (KONO WAKANA)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：50359593

木田 拓也 (KIDA TAKUYA)

独立行政法人東京国立近代美術館・主任研究員

研究者番号：40300694

神野 真吾 (JINNO SHINGO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：90431733

藤川 哲 (FUJIKAWA SATOSHI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50346540

赤塚若樹 (AKATSUKA WAKAGI)

首都大学東京・人文学研究科・准教授

研究者番号：80404953

研究分担者期間(平成20-21年度)

久木元 拓 (KUKIMOTO TAKU)

首都大学東京・システムデザイン学部・准教授

研究者番号：90514092

研究分担者の削除(承認日:平成22年9月28日)

(3)連携研究者

なし